尼君、髪をかきなでつつ、「けづることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとはかなうものし給ふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿におくれ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。ただ今、おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ。」

ⓢ尼君→若紫　形容詞・語幹　間投助詞　形容詞・用　ⓢ尼君→若紫
係助　形容動詞・用　打消「ず」体　形容詞・已
過去「き」体　接助
完了「り」用　過去「き」体　ⓢ尼君→故姫君　形容詞・用
ⓢ尼君→故姫君　終助　終助　意思「む」終　現在推量「らむ」体　ⓚ尼君→若紫

「いかで」が疑問の意味なので文末が連体形となる。

とて、いみじく泣くを見給ふも、すずろに悲し。をさな心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる、つやつやとめでたう見ゆ。

存続「たり」体　存続「たり」体
形容詞・用　ⓢ作者→源氏　形容動詞・用　形容詞・終

生ひ立たむ　ありかも知らぬ　若草を　おくらす　露ぞ　消えむそらなき　はつ草の　生ひゆく末も　知らぬまに　いかでか露の　消えむとすらむ

推量「む」体　打消「ず」体　係助　推量「む」体　形容詞・体　完了「たり」体　係助　打消「ず」体　推量「む」終　現在推量「らむ」体
縁語　縁語　縁語　縁語

尼君は、（少女の）髪をかき撫でながら、「（髪を）とかすことを嫌がりなさるけれど、美しい髪ですこと。たいへんたわいもなくいらっしゃるのが、気の毒で気がかりなことだよ。これほど（の歳）になると、本当に子供っぽくない人もいるのに。亡き姫君は十歳ほどで父君に先立たれなさった時、物事を十分に理解しなさっていたことだよ。たった今、私があなたを見捨て申し上げたならば、どうやって暮らしなさろうとするのだろう。」と言って、（尼君が）ひどく泣くのを（源氏が）ご覧になるにつけても何とはなしに悲しい。子供心にも、やはり（尼君の顔を）見つめて、目を伏せってうつむいた顔に、かかっている髪がつやつやと美しく見える。

どのように成長していくのかもわからない若草を（若草のような姫を）あとに残して消える空はない（露のようなはかない私は消えようにも消えることはできない）

また、座っていた女房が、「本当に。」と泣いて、初草（のような姫君）が成長していく末も知らないままにどうして（あなたは）露のように消えようとしているのでしょうか

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/